

鯉の話

森 朋也（山口大学教育学部）

「津和野の鯉は家族だから食べない」

最近、ひょんなことから「鯉」について調べている。

きっかけは津和野町を訪問した際に、「鯉は家族だから食べない」という話と出会ったことだ。鯉が家族？ 本当に単純な興味からだった。そこから少しずつ調べるようになり、津和野へ通うようになった。

そもそも、鯉を食べる風習は城下町の津和野にはなかったようだ。江戸時代には「七浦まわって魚がなければ津和野にいけ」という言葉があり、内陸にもかかわらず、日本海側から海の魚が流通していた。その流通路は「鯖街道」とも呼ばれていたそうである。また、津和野には今でも行商が市を開いていた場所を「魚町」と呼ぶ名残がある。

他方で、広島や島根の他地域では郷土料理として鯉食が存在している。

1971年に放送された『新日本紀行』には、当時の津和野の様子が映し出されている。殿町通りや津和野川で遊泳する鯉に観光客が餌をあげ、夜は旅館で鯉料理を食べる。まさに鯉三昧である。他方で、旅館の亭主が鯉を調理する際には線香を焚きながら南無阿弥陀と唱え、仕事を終えた後に、寂しげな姿で酒を飲む主人の様子も映されていた。

『新日本紀行』では、生活圏において住民が鯉を飼っている様子も垣間見られた。住民が町中に張り巡らされた用水路の水を自宅に引き入れて鯉を飼い、その鯉を愛でる姿があったのだ。鯉の池は自宅の中に造られている家もあれば、通りに面して造られた家もあり、他の住民の目にも触れるようになっていた。そこには、観光としての「鯉の町」とは対照的な、「家族としての鯉」が描かれている。

津和野が観光地として全国的に有名になり始めたのは1970年前後。別に鯉食によって有名になったわけではないのだが、観光客が増えるにつれ、客側に求められる形で鯉料理を出す旅館や飲食店が出てきたようだ。

津和野の鯉に関する記述も、1970年代から多く見られるようになる。もともと坂崎直盛が津和野の町に用水路を整備した際、ボウフラ対策だとか非常食用だとか放流の

由来はいくつかあるが（どこまで本当かは怪しいものだが）、殿町通りの鯉は昭和9年に町の有志らが放流したらしく、観光スポットとしての歴史は意外と浅い。ただ、殿町通りに放流された鯉はもともと家で鯉を飼っていた住民らからも寄贈されたようなので、家庭で鯉を飼う風習自体はもう少し前からあったのだろう。



写真①：殿町通りの鯉（筆者が撮影）

鯉を愛でてきた住民らからすると、鯉料理というのはかなり抵抗があったらしい。旅館の主人も住民から咎められたと、後に息子さんが書き残している。また、津和野の観光発展に尽力した観光協会の会長も、鯉料理には後ろ向きだったそう。町と鯉との関係には、それほど気を遣っていたのだろう。当時ガイドクラブで働いていた方も、旅行者には「津和野では鯉は家族だから、住民は決して食べない」と努めて伝えたという。

一部の住民が飼っていた鯉の話が、いつのまにか主語が「津和野の人」に変わり、津和野の人柄を表す言説になっていった。観光がその大きな契機になったのかもしれない。

面白いことに、鯉料理を出していた側は当時、「これは津和野の鯉ではなく、他所から仕入れた鯉です」と言って住民を納得させたい。鯉食への反対は、どうやら一般的な動物愛護の精神によるものではないようだ。「そこで共に暮らす家族」としての鯉。ゆえに「食べる」ことは決してないのだ。

私は他にも、鯉に由来する地域を歩いている。そこで出会うのは、場所ごとに異なる鯉の言説であり、鯉文化である。果たして、それは人間が面白おかしく鯉を描いているのだろうか。人間が「言わされている」のか。はたまた、共に紡ぎ出しているのだろうか。

過去から未来にかけて紡がれてきた、鯉と町の関係。あるいは、その関係を描くために「過去との連続性」が正当化されているのかもしれない。

坂崎直盛といえば千姫事件。津和野の緋鯉は、直盛の叶わなかった「恋」に結び付ける言説もある。なんという強引さだろう。でも、なんだか面白い。

ある知人の研究者に話したら、「フナの方がたくさん研究されているし、鯉なんてつまらないからフナを調べなさい」と言われた。なるほど、私は人とはズレているらしい。

もしかしたら、私は、鯉に恋焦がれ、鯉に泣くのかもしれない。

だが、危ぶむなかれ。危ぶめば道はなし。

まだ、旅は続きそうである。